

日蓮遺文における鑑真について

野 中 隆 謙

はじめに

日本国に受戒の作法を伝え、日本律宗の開祖となった唐僧鑑真が、ある時は荒天の為に、ある時は人の為に阻まれ、渡海すること五回、失明しながらも十一年の歳月を経て、遂に六回目にしてようやく日本国の土を踏むことができたという話は有名である。^①

このように鑑真は日本に律を伝えた僧としてつとに知られているが、『唐大和上東征伝』によると彼は来朝の際に『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』『四教義』『次第禪門』『法華懺法』『小止観』『六妙門』等の天台章疏をもたらししている。^②

日蓮聖人（以下「聖人」と略称す）は、「聖武天皇の御宇に大唐の鑑真和尚渡す所の天台の章疏、四十余年を経て已後始めて最澄之を披見し、粗仏法の玄旨を覺り了

んぬ。最澄、天長地久の為に延暦四年叡山を建立す。^③」と伝教大師最澄（以下「最澄」と略称す）が鑑真の将来した天台書籍を披見することによって、ようやく仏意を得、天台宗に帰入すべき機縁をつかんだことを述べている。

また最澄の弟子である仁忠の伝えるところによると、比叡山に入山し、仏典の研鑽と心身の修練に心血を注いでいた最澄は、この鑑真将来本を写得して天台書籍を閲覧する機会を得、天台教学の研究に専心したといい、やがて最澄は入唐求法したのち日本天台宗を創始した。いうまでもなく後世の聖人の宗教はこの最澄が開いた天台宗を母胎として生まれたものである。

本稿は日蓮遺文における鑑真の記述をもとに聖人の鑑真観について考察を試みるものである。尚、考察の対象とした遺文は真蹟の現存するもの、また曾て存在したも

のに限った。

一、鑑真略伝

鑑真^①は唐の揚州江陽県に生まれた。俗姓は淳于。長安元年（七〇一）、一四歳で揚州大雲寺の智滿禪師について出家し、長安元年（七〇一）に大雲寺に配属される。神龍元年（七〇五）、光州の道岸律師について菩薩戒を受ける。景龍二年（七〇八）、長安の実際寺で天台宗第二祖章安大師灌頂の孫弟子である弘景から具足戒を受ける。以来長安・洛陽の学匠を尋ねて四分律等の戒学を学び、弘景からは天台学を習得した。壮年に及んで学成り、帰郷して大明寺に住し戒律を講じた。鑑真による受戒者四万余人、造寺造像は数知れず、袈裟三万枚を作って五台山に寄付し、「江淮の間に、独り化主たり」と称讃され、当時の中国仏教界における律の第一人者となった。

天宝元年（七四二）、日本僧栄叡・普照の屈請により渡海を決意し、航海に失敗すること五回、この間に栄叡は病死し、鑑真は失明した。第一回目の渡航は天宝二年（七四三）、従者二人と共に出発したが、賊起こって道通ぜず、随行者の中で内訌があり、新羅の僧如海の密告によって、州長に止められ、船は官庁に没収された。第

二回目は同年一二月、同行者合わせて八五人と共に再び出発したが、逆風に遭って果たせず。船を修理し好適な風を待って出航したが、今度は暗礁に乗り上げ破船してしまった。第三回目の天宝三年（七四四）は、弟子の法進を遣わして新たに船を購入するも、栄叡が捕縛され渡航の計画は断念される。第四回目は高弟の靈祐が師の航海を止めんとして官庁に告げ、この為に押さえられて護送された。第五回目は天宝七年（七四八）、揚州崇福寺にあって栄叡・普照と計って船を造り、六月二十七日随行三五人と共に発つのであるが、途中難風に遭い停まること二ヶ月余、その間飲料水は欠乏し、米を嚙んでも喉乾き、鹹水を飲めば腹が張れて非常な辛苦を嘗めた。航海一二日目に現在の海南島に着き、翌天宝八年（七四九）陸路万安州を経て岸州に至る。ついで羅州・象州・白州・藤州・梧州・桂州を経て、始安府に留まること一年、翌天宝九年（七五〇）に揚州龍興寺に至る。時に渡航当初より大いに努めてきた栄叡は病を染んで奄然として没し、鑑真は眼を患い失明する。そして天宝十二年（七五三）一〇月、法進・曇静・思託等の一四人の弟子を率いて第六回目の航海に出、遂に同年一二月薩摩の秋妻屋浦に到着した。時に鑑真六六歳。道俗の歡迎甚大であった。孝

謙天皇等に迎えられて東大寺に住し、天宝一三年（七五四）四月、勅命によって東大寺大仏殿の前に戒壇を建て、聖武天皇・孝謙天皇以下四四〇余人に戒を授ける。のち戒壇院を建立する。天平宝字三年（七五九）、戒律学習の道場として別に一寺を建て、唐招提寺と号す。天平宝字五年（七六一）には、下野薬師寺・筑紫観世音寺にも戒壇を建て、東山道や西海道の国々の出家者の便宜がはかられた。天平宝字七年（七六三）五月六日、結跏趺坐西面して寂す。世寿七六。戒律の他に彫刻様式・薬草の知識の紹介者としての功績も大きい。唐招提寺の盲目の鑑真像は入滅直前に製作されたものと推定され、わが国現存最古の肖像である。

二、日蓮遺文における鑑真について

別表は日蓮遺文のうち、真蹟現存遺文・真蹟曾存遺文・真蹟断片現存遺文・真蹟断簡現存遺文に限定して、鑑真に関する記述を示したものである。遺文を概観してみると『法華取要抄』⁶には日本律宗の元祖とあり、『曾谷入道殿許御書』⁷には、唐の南山律宗の祖である道宣律師の流れをくむ鑑真が、日本に律宗を伝えた等とあるように、歴史が示す如く鑑真を「律宗の祖」とする記述がみ

える。

しかし一方で『神国王御書』⁸では、釈尊滅後インドに仏教を弘めた大迦葉以下師子尊者に至るまでの付法蔵の二十四祖が小乗教や権大乘教のみを弘めて、法華経の実義を弘めなかったように、鑑真和尚は法華経が仏の真実の教えであることを知りつつも弘通しなかったと述べ、『撰時抄』⁹では、聖武天皇の治世に大唐の鑑真和尚は唐の玄宗天宝二年（七四三）以来、六度日本に出航して十二年目の天平勝宝六年（七五四）に来朝し、天台・律の二宗を伝え、四分律宗は弘めたが、天台宗はただ天台三大部等を伝えたばかりで、天台法華宗を弘めず、来朝して十年後の天平宝字七年（七六三）に入滅したとある。同様に『下山御消息』¹⁰には、唐の揚州龍興寺の鑑真和尚が中国から日本へ天台法華宗を渡したが、当時の衆生の機根が未熟であるが故に法華経の法門は心中に秘して、中国の道宣律師が弘めた小乗戒を伝え、奈良の東大寺と下野の薬師寺との三カ所に戒壇を建立した。しかし、これは法華経を弘める為の方便であり、手段であってそれは恰も儒教の孔子・老子・顔回の三聖が仏の御使いとして中国に生まれ、仏教の初門として礼儀と音楽とを人々に教えた如きものであり、このことを天台大師智顗が

『摩訶止観』に、『金光明經』を引いて「三人の聖者を遣わして、中国を教化せしめる」^①と述べ、妙楽大師湛然は『摩訶止観輔行伝弘決』の中で「礼樂前に馳せて、真道後に啓く」^②と述べていることを示している。

おわりに

以上日蓮遺文の示す鑑真の記述をみてきた。これにより鑑真を、①日本に律を伝えた「律宗の祖」とするものと、②「天台宗の僧侶」であるとするものに大別することができる。

歴史が伝えるところの鑑真は「日本に律を伝えた中国僧」或いは「日本律宗の開祖」としてのイメージが強いが、日蓮遺文を通してみると「天台学匠」としての鑑真の姿がそこにある。

冒頭に述べたように、鑑真の将来した天台書籍は『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』『四教義』『次第禪門』『法華懺法』『小止観』『六妙門』等であったとされているが、これは天台教学の全貌を概観するに足る量であるといえる。この事は鑑真の天台学匠たる面を充分に語るものである。

石田瑞麿氏はその著『日本仏教思想研究』一の中で、

『唐大和上東征伝』に、鑑真が日本僧榮叡・普照の要請により渡海を決意した以後の事蹟として、天台山国清寺を二度訪れたこと^③、また鑑真の弟子である思託が自らを「天台僧思託」^④と称していたこと、さらに『註金剛鉤論』の序には、最澄が日本国における法華経弘通の聖徳太子と共に鑑真を加え、天台宗の建立者という意味において「二聖」^⑤と讃仰していることなどを指摘しており^⑥、これらの事柄は鑑真が天台学匠であったことを端的に示している。

また注目すべきは、凝然の『三國仏法伝通縁起』が伝えているように、鑑真が東大寺に建立した戒壇院の当初の本尊が多宝塔中の二仏並座の儀式を顕したものであるならば、「律僧鑑真」ではなく、まさしく「天台僧鑑真」としての面目を垣間見ることが出来る。

鑑真は幾多の困難を乗り越え、艱難辛苦の末に来朝し、それまで日本仏教界が等閑視していた「戒」をもたらした。聖人は『撰時抄』^⑧で述べているように、鑑真の弘通した戒を小乗と否定し、これは最澄が建立した円頓戒によって克服されたものとしている。しかしながら最澄が天台大師智顗の著作に接することができたのは一に鑑真が天台書籍を将来したおかげである。日本仏教史を考

える上で、鑑真の来朝は日本仏教界の大きな転換点であった。そして最澄の天台書籍との邂逅がなければ、最澄は天台宗へと帰入する機縁をもつこともなく、入唐求法して日本天台宗を比叡山に樹立することもなく、法相宗の得一との世紀の仏性論争を交えることもなかった。その意味でいうならば、鑑真の成した役割は偉大であったといえる。

註

(1) 鑑真の来朝について、『安国論御勅由来』『撰時抄』『報恩抄』『下山御消息』『和漢王代記』の表記では「聖武天皇の御宇」とあるが、聖武天皇は四年前の天平勝宝八年(七四九)に退位している為、実際には『神国王御書』にある如く「孝謙天皇の御宇」(『定遺』八七九頁)とあるのが正しく、『断簡七〇』には「天台宗・律宗の渡る事は、天平勝宝六年甲午二月十六日丁未乃至四月、京に入り東大寺に入る。天台止観等云云。諸伝之に同じ。人王才四十六代孝謙天皇の御宇也。聖武は義謬れる也。」「(『定遺』二五〇三頁)とある。また『録内啓蒙』には「日本に到着する事は孝謙の勝宝六年なれども大唐の発足は天宝二年六月にして聖武の御宇天平一五年に当れば発足の時に從へて同時代と遊ばせり」(卷一〇の七七丁)、「鑑真の授戒は天平勝宝五

年の事なれば孝謙の御宇なれども聖武の事を天皇初登壇等云へり太子は定て孝謙を指るなるべし是則孝謙の御宇まで聖武尚存命にて万機を司れる故なるべし。これに准せば今の御書も聖武尚ほ存命なる故に同時代と遊せりと会得しても妨なかるべき歟。聖武は勝宝八年の崩御なり」(卷一〇の七八丁)とある。

(2) 『仏全』第一二三卷一二〇頁上「天台止観法門。玄義。文句。各十卷。四教義十二卷。次第禪門十一卷。行法華懺法一卷。小止観一卷。六妙門一卷。」

(3) 『定遺』四二二頁

(4) 『伝全』第五卷付録五頁「於_ニ是大師隨_レ披覽_{スルニ}起信論疏。並華嚴五教等_ヲ。猶尚_ニ天台_ヲ以為指南_ニ。毎_ニ見_ル此文_ヲ。不覺_ニ下淚_シ。憤然_ニ。無_レ由披閱_ス天台教述_ヲ。是時邂逅_ニ値_フ遇知_ニ天台法文所在_ニ一人_ヲ。因_レ茲得_レ寫_ス三取_ヲ。円頓止観。法華玄義。並法華文句疏。四教義。維摩疏等_ヲ。此_ハ是故大_ニ唐鑑真和上_ノ將來也。適得_ニ此典_ヲ精勤披覽_ス。義理興_ニ彌_ニ仰_ス。弥高。隨鑽_ニ隨堅_ス。本仏本懷。同開_ニ於三乘之門_ヲ。内証内事。等付_ニ於一乘之寶車_ヲ。」

(5) 『唐大和上東征伝』には、鑑真配属の寺院について「便就智満禪師出家為沙弥。配住大雲寺。後改爲龍興寺。」「(『仏全』第一二三卷一〇九頁上)とあり、この文について従来の研究では大雲寺が後に龍興寺と改称せられたとの意に解釈しているが、安藤更生氏はその著『鑑真大和上伝之研究』の中で、このことについて詳細に考察し、揚

州大雲寺は後に開元寺と改められており、大雲寺は龍興寺の前身ではなかったと述べている。(同書一五頁)

略 称

(6) 『定遺』 八一〇頁

『仏全』

『大日本仏教全書』

(7) 『定遺』 九〇五頁

『伝全』

『伝教大師全集』

(8) 『定遺』 八八七頁

『定遺』

『昭和定本日蓮聖人遺文』

(9) 『定遺』 一〇一四頁

『正蔵』

『大正新修大蔵経』

(10) 『定遺』 一三二四頁

(11) 『正蔵』 第四六卷七八頁^c

(12) 『正蔵』 第四六卷三四三頁^c

(13) 『仏全』 第一一三卷一三三頁下「日暮至国清寺」。松篁

蓊鬱。奇樹璀璨。宝塔玉殿。玲瓏赫奕。莊嚴華飾。」石田氏前掲書によれば鑑真が天台山国清寺を二度訪れたとあるが、『唐大和上東征伝』の記述では天宝三年(七四四)冬の一度だけである。

(14) 『仏全』 第一一三卷一二二頁下

(15) 『伝全』 第四卷一頁

(16) 石田瑞麿著『日本仏教思想研究』一(戒律の研究上) 七五頁

(17) 『仏全』 第一〇一卷一二四頁上「所立戒場有三重壇表大乘菩薩三聚淨戒之故。於第三重安多宝塔。塔中安釈迦多宝二仏像。表二乗深妙理智冥合之相。鑑真和尚宗研天台律弘四分。四分当宗分通大乘。況依内証天台教宗立壇弘律。」

(18) 『定遺』 一〇二六頁

書名	祖壽	記述 〔昭和定本日蓮聖人遺文〕出典(頁)	系年
安国論御勘由來	四七歳	★聖武天皇の御宇に大唐の鑑真和尚渡す所の天台章疏、四十余年を経て已後始めて最澄之を披見し、粗仏法の玄旨を覓り了んぬ。最澄、天長地久の為に延暦四年叡山を建立す。(四二二)	文永五年四月五日
法華取要抄	五三歳	★而るに彼々の宗々の元祖等、杜順・智儼・法蔵・澄観・玄奘・慈恩・吉祥・道朗・善無畏・金剛智・不空・道宣・鑑真・曇鸞・道綽・善導・達磨・恵賀等なり。(八一〇)	文永一一年五月二四日
神国王御書	五四歳	★譬へば日本国の行基菩薩と鑑真和尚との法華經の義を知り給いて弘通なかりしがごとし。(八八七)	文永一二年二月
曾谷入道殿許御書	五四歳	★觀勒の流の三論・成実、道昭の渡せる法相・俱舍、良弁の伝うる所の華嚴宗、鑑真和尚の渡す所の律宗、弘法大師の門弟等、誰か円頓の大戒を持たざらん。(九〇五)	文永一二年三月一〇日
撰時抄	五四歳	★同じき御代に大唐の鑑真和尚、天台宗と律宗をわたす。其中に律宗をば弘通し、小乗の戒場を東大寺に建立せしかども、法花宗の事をば名字をも申し出させ給はずして入滅し了んぬ。(一〇一四)	建治元年六月
報恩抄	五五歳	★伝教大師は日本国の士也。桓武の御宇に出世して欽明より二百余年が間の邪義をなんじやぶり、天台大師の円慧・円定を撰し給うのみならず、鑑真和尚の弘通せし日本小乗の三処の戒壇をなんじやぶり、叡山に円頓の大乗別受戒を建立せり。此の大事は仏滅後一千八百年が間の身毒・尸那・扶桑乃至一閻浮提第一の奇事なり。(一〇二六)	建治二年七月二日

★大唐の揚州竜興寺の僧鑑真和尚は、天台の末学、道暹律師の弟子、天竺の末に日本国にわたり給いて、小乗の戒を弘通せさせ給いしかども、天台の御釈持来りながらひろめ給はず。人王第四十五代聖武天王の御宇なりとかたる。(一一〇八)

★此十四人は華嚴宗の法蔵・審祥、三論宗の嘉祥・観勒、法相宗の慈恩・道昭、律宗の道宣・鑑真等の漢土・日本の元祖等の法門、瓶はかはれども水は一也。(一一〇九)

